

新出の西巖寺蔵「小川貫式資料」について

中川 剛

一 はじめに

近代以降、日本の中国仏教史の研究は大正期に本格的に始まり、昭和期には、仏跡調査を伴った多くの中国仏教史に関する論文が発表された。^①この時期の中国仏教史研究の特徴は、満州事変以降、国家や軍部との提携において発展したことにある。本稿で取り上げる小川貫式（一九二二年—二〇〇六年：以下貫式と略称する）は、戦後、龍谷大学教授となり、退職後は同学の名譽教授となった中国仏教史の代表的研究者であるが、彼もまた、昭和十四年（一九三九）、浄土真宗本願寺派の興亜留學生として中国に渡り、丹念な仏跡調査を行った経験を持つ。

貫式は、生前、膨大な蔵書や調査資料を蒐集しており、これらは現在も西巖寺に蔵され、「西巖寺橋資料」や「清光山西巖寺蔵和漢古書目

録」「西巖寺小川貫式蔵現代史資料集成」として、論文や冊子等に発表されてきた。これに対して、今回、新出資料として紹介するのは、貫式の自筆原稿と、スクラップブック六冊に貼付された中国留学時代の書簡・パンフレット・写真類である。これらは、貫式の龍谷大学在学中から、中国留学を経て、龍谷大学教授、龍谷大学図書館長となり、退職するまでの約五十年間のものであり、スクラップブックに貼付された細かいものも含めれば、千点近くにもなる。同朋大学仏教文化研究所では、今年度よりこれらの調査分析に着手しているが、本稿では、この新出資料の調査の意義を示すためにも、まずは西巖寺において、過去のような調査が行われてきたかについて、簡略に紹介していくことから始めていくこととする。

二 西厳寺所蔵の資料調査

平成十八年（二〇〇六）九月、貫弑が亡くなった直後から、長男の徳水氏の呼びかけで、龍谷大学名誉教授・小田義久氏を代表として、有志による「小川貫弑先生貴重書研究会」が編成された。この研究会では、貫弑所蔵の古写本の断簡や「西厳寺橋資料」、これは第二次・第三次大谷探検隊員であった橋瑞超から貫弑へと寄贈された探検隊収集資料であるが、こうした古資料類について、大木彰氏、橋堂晃一氏、吉田豊氏の諸氏が中心となって調査・研究がなされ、『東洋史苑』第七〇・七一合併号「故小川貫弑先生追悼号」に、「大谷探検隊収集「西厳寺蔵橋資料」について」として、その成果が発表された。また、この号では、貫弑への追悼文を含め、詳細な略年譜・著作目録などが収められた。

さらに、小川貫弑先生貴重書研究会では、この作業と並行し、デジタル資料として平成二十年（二〇〇八）に二枚のCD-ROMを作成した。そして、「西厳寺蔵橋資料」「古写経断簡集成」をA版に、「小川貫弑先生著作集」をB版として、貫弑の収蔵品と刊行著作物をこれに収載している。そして、近年、平成二十二年（二〇一〇）には、「西厳寺橋資料」を調査・研究した吉田豊氏によって、『京都大学文学部研究紀要』第四十九号に「新出ソグド語資料について―新米書記の父への手紙から―西厳寺橋資料の紹介を兼ねて―」という簡易な資料紹介もなされている。

また、この西厳寺は同朋大学仏教文化研究所とも学術的なつながりがある。すなわち、平成二十三年（二〇一一）、貫弑所蔵の和本類について西厳寺に調査に入り、その結果を目録にまとめている。この調査のきっかけは、同研究所室長であった故・渡辺信和に対して、徳水氏が蔵書類に関する相談をしたことに始まっている。その後、渡辺は、高橋良正氏に西厳寺の和漢古書目録の編纂を依頼し、平成二十一年（二〇〇九）三月頃から一年半をかけ、六回の調査を経て、「清光山西厳寺蔵和漢古書目録」として、その成果が『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十一号に掲載された。なお、この調査の期間中、当学教授榎木瑞生もアジア開教に関する資料を調査しており、徳水氏はその助言によって関連する貴重蔵書のデジタル化を行い、それに目録を付けて、『西厳寺小川貫弑蔵現代史資料集成IⅡ』（CD-ROM）として刊行した。

以上が、これまでの西厳寺調査の概要であるが、今回、新出資料として紹介するのは、これらの調査では注目されてこなかった、貫弑個人の中国仏教史研究に関する自筆原稿・写真類である。

三 小川貫弑の生い立ち

貫弑が龍谷大学研究科に入学した昭和十年代は、中国仏教の研究が飛躍的に発展し、京都では京都大学・龍谷大学・大谷大学が連携して、雑誌『支那仏教史学』（昭和十二年―昭和十九年）が発刊された時期でも

あった。また、後述するように、貫式が学んだ龍谷大学でも、昭和八年（一九三三）四月、史学講座から仏教史学の講座が分立し、『龍谷史壇』が発刊されるなど、仏教史が活況を呈していた時期でもある。浄土真宗本願寺派布教使であった父・貫練の助言もあり、貫式は中国仏教史の研究を志したというが、本章では、貫式がそのように研究を志すに至るまでの経歴について少し触れてみたい。なお、貫式の経歴については、『東洋史苑』の追悼号に掲載された猪飼祥夫氏による略年譜があるほか、徳水氏も西厳寺の寺院史および貫式の年譜を作成しており、以下、これらを参考にしながら略述していくことにする。

貫式は明治四十五年（一九一二）三月一日、浄土真宗本願寺派の末寺、西厳寺第十一世小川貫練と登美^{とみ}の長男として生まれた。同胞には上に姉の禮子があり、妹には信子と昭子が、さらに弟の貫之がいた。しかし、貫之は幼くして夭折したといい、そのため、貫式は西厳寺の住職の後継として厳しく育てられた。

貫式と龍谷大学との関わりは、昭和四年（一九二九）に始まる。この年の三月、貫式は岐阜県立武義中学校第四学年を修了し、龍谷大学予科に入学した。門徒の有志が、貫式が十歳から寺の手伝いとして月参りをした布施を貯蓄したものを学費に充てたという。ただし、このとき、彼はまだ中学校在学中で、この受験は親に相談もなく行われたらしい。そのため、龍谷大学の担当職員が父貫練の知り合いであったことから、合格手続きの猶予をもらい、直ちに岐阜に帰省し、龍谷大学への入学の承

諾を得たという。

ちなみに、父の貫練は、明治七年（一八七四）、岐阜県本巣市上保の農家、大熊喜八の次男として生まれているが、農家を継ぐのを嫌ったためか、明治十九年（一八八六）本巣市上保の善照寺の徒弟となり、明治二十二年（一八八九）に地方の本願寺派僧侶の育成機関であった岐阜・金阜教校へ入学した。三年後、大分県中津の摂受吐月勤学に師事したが、吐月が亡くなったために帰郷し、岐阜の金阜教校へ再入学した。そして、布教のため、各務原に立ち寄った際、西厳寺に後継住職がないと紹介されたことがきっかけとなって、明治二十九年（一八九六）十月、西厳寺に入寺することになる。翌年九月には、浄土真宗本願寺派の大学林に入学し、同年十一月に住職に就任した。明治三十四年（一九〇一）、仏教大学（現・龍谷大学）を卒業し、布教使として北陸や北海道などを中心に、全国を布教したという。なお、卒業と共に、西厳寺十世普観の娘、玉日^{たまひ}と結婚しているが、この坊守の玉日は十年も経たないうちに二十五歳の若さで病死してしまったため、岐阜県関市山田村の地主の娘、後藤登美と結婚し、その間に生まれたのが貫式であった。登美の実家の後藤家は、製糸工場を営み、西厳寺に金銭的援助を行っていたが、昭和初期には不況のあおりを受け、廃業したという。さて、昭和八年（一九三三）四月、貫式は龍谷大学文学部仏教史学科に入学した。大学入学するにあたり、貫式は当初、真宗学を専攻するつもりであったが、『龍谷史壇』を編集していた龍谷大学研究科の浜中寛

淳が、当時ハイカラなカンカン帽をかぶり、浴衣に袴をつけて仏教史学科の勧誘に来たといひ、それが第一の動機であったと貫式の手記には記されている⁴。また、仏教史学科を選んだ理由として、父・貫練が「布教使になるならば、中国仏教史が良い」と助言したとされる⁵。

また、同じく貫式の手記によれば、当時の龍谷大学では、禿氏祐祥・西光義遵・高雄義堅の三教授が龍谷大学の仏教史を牽引し、「この三教授のチームワークをとった指導によつて龍大の史学が華々しい活躍を上げる」時期であったという⁶。このような経緯があり、中国仏教史を専攻することになった貫式は、昭和十一年（一九三六）、文学部の卒業時には、「趙宋時代の浄土教」という論題で、中国浄土教を研究テーマに卒業論文を執筆している。つづいて、貫式は龍谷大学研究科中国仏教史学に入學するが、ここでは中国仏教史の高雄義堅に師事したとみられる。學術誌『龍谷史壇』『支那仏教史学』の編集を手伝いながら、自身の研究に打ち込み、さらには大谷大学教授の道端良秀らの輪談会にも参加するなど、充実した学生生活を送っていたようである。そして、研究科の修了時には、「南宋仏教史研究」と題した論文を、教団編と教学編の二冊をまとめて提出し、昭和十四年（一九三九）三月に同研究科を修了している。

四 西本願寺興亜留学生として

興亜留学生の「興亜」という言葉は、昭和十三年（一九六四）、近衛文麿内閣が出した「東亜新秩序」声明に始まる。すなわち、この声明以後、宗教界もこれに呼応し、この時期、各宗派・各団体が「興亜」を冠した運動や事業を行なったのである。浄土真宗本願寺派では、法主・大谷光瑞が昭和十四年（一九三九）に「興亜奉公の消息⁷」を出し、本山ではこれを具体化した「興亜促進運動」を推進していくこととなる。当時の執行・梅原真隆は『教海一瀾⁸』紙上で、「興亜」とは大東亜建設のために物心両面で国家に「奉公」することであると述べているが、その運動には、①「興亜促進御消息披露特別布教」と、②「興亜促進強調臨時布教」の二つがあり、①は法主の大谷光瑞の「興亜奉公の御消息」を徹底すること、同年七月から翌年三月までの期間、日本全国の教区においてこれを実施するものであった。また、②では三綱・十要が規定されていて、そこにいう三綱とは「信念確立」「興亜認識」「経済報国」であり、興亜の信念を確立し、興亜を認識し、経済面でも報国するというものであるが、その具体的な内容として、十要の「民族親和」「資源愛護」「防共達成」「満蒙拓土」「皇軍感謝」「傷病兵慰問」「英霊追弔」「遺家族共励」「銃後奉公」「生活刷新」があった。そして、こうした興亜促進運動のうち、本願寺派が重要視したのが中国への現地慰問で、留学生に関してまでは言及されていないが、貫式は手記の中で、

昭和十四年三月研究科を「南宋仏教史研究」と題し教団篇と教学篇の二冊をまとめて卒業ができた。時恰も日本は大陸進出の戦時体制

であり、本願寺において中国に開教師派遣が盛んとなるにつれた興亜留學生を募集して中国大陸の仏教事情を調査研究する必要性が認められ、北京へは三上諦聴新野修基、中支へは私と海野の二人が派遣されることになった。これは禿氏西光高雄諸教授の推薦によるものであった。⁹⁾

と述べており、貫式には自身が「興亜留學生」という立場で留学したという自負があった、と思われる。

ちなみに、本願寺派の留學生は明治初期まで遡る。海外視察や研究調査を目的として、開教師や研究者を留学させていたが、昭和十年頃から満州を意識するようになり、昭和十二年（一九三七）には、満州に「日語学校」を、龍谷大学内に「満州語学院」を開設し、満州語学院で勉強させて学部卒業生を満州に留学させることが行われた。なお、留學生については、「北支留學生」¹⁰⁾や「満州留學生」¹¹⁾などの名称があり、貫式は学部・研究科の担当教授高雄義賢の推薦をもらい、昭和十四年（一九三九）四月、「興亜留學生」として、中華民国へ渡り、南京で約二年間、北京に約一年間、研究者として調査活動をしながら滞在することとなる。

さて、この年の四月、上海に上陸した貫式は、上海別院の小笠原彰真開教総長によって南京への派遣を命じられる。そして、南京の太平路白菜園にあった西本願寺出張所の横湯通之主任の紹介で鳳山古林律寺に入り、中国僧と共に南京仏学院で教育生活を送ることになった。ここで貫

式は、「大学で書物を通じて理解していた中国仏教と現実に、中国の仏寺に入って中国僧と共同生活してみると、全くその問題が複雑で相違することを痛感」したと述べている。¹²⁾

古林律寺については、貫式の論文、「中国現代の放戒と戒疤・戒牒」で簡略に触れているので引用してみよう。

南山律寺の復興者三昧寂光の師匠である、古心慧雲師が明代の萬曆年代にいた古林庵が清代に律寺と発展して現代に及べるものである。慧雲律師がここに石戒壇を築き、律門の第一祖庭としてより今は第十八代の住持である。江南に於いて著名な律寺として毎年春秋の二期には昔ながらに、寶華山の授戒の儀礼と同じ放戒が行われているのである。¹³⁾

このように寺の歴史が紹介されているが、この古林律寺内に設置されていたのが南京仏学院で、現地の中国人僧侶に対して日本式の仏教教育を施すことを目的とした設置であったようである。興亜院華中連絡部調査機関がまとめた「南京及蘇州に於ける仏教の实情調査」によれば、¹⁴⁾この南京仏学院は、日華仏教聯盟南京総会の依頼により、経営面では西本願寺が責任者となり、同派の対支事業中より年額三千六百円の資金が当てられていたとされる。また、日華仏教連盟とは、浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・浄土宗・日蓮宗・本門本法華宗・曹洞宗といった、南京に進出した日本仏教各宗派が組織した南京日本仏教連合会を中枢として、そこに中国側の南京仏教会・蒙蔵章嘉事務所・西藏班禪駐京弁事処・中国

安清同盟が加盟したものである。高冠吾南京市督弁を総裁とした団体で、南京に本部を置き、鎮江・揚州に支部を設置していた。日本の仏教教団が中国開教に苦戦するなか、相互に助け合いながら教勢を拡大するために組織された団体と考えていいだろう。

なお、南京仏学院の生徒数は十名で、古林律寺内に合宿させ、規律ある団体生活をさせていたという。特徴的なのは、詰襟洋服の制服を着用させていたことであった。授業科目は、修身・日本語・仏教史・仏教概論・天台・華嚴・唯識・仏教論理・禅文学・仏前作法・国文習字・音楽体操を講義し、日本人と中国人の双方から職員数名と講師数名を人選したと記されている。貫式はここで主事の役職を与えられ、教鞭を取りながら、南京の棲霞山の調査を行っていたとみられる。

五 中国仏教史の発展と貫式の仏跡調査

中国仏教史の発展は、常磐大定の五度による中国への仏跡調査によって著された『古賢の跡へ支那仏蹟踏査』¹⁵⁾によって、文献学から現地調査の重要性が示された。このことにより、中国仏教史の研究者は、次々と中国に渡り、歴史的な発見が相次いで発表された。龍谷大学では学術誌『龍谷史壇』を中心に、中国仏教史に関する論文が発表され、昭和十一年（一九三六）には、学術誌『支那仏教史学』が龍谷大学・大谷大学・京都大学の教授や研究科の学生を中心に法蔵館より創刊された。また、

同年、『日華仏教研究会年報』が創刊されるなど、昭和十年（一九三五）以降、中国に関する雑誌が多く創刊された。¹⁶⁾

貫式もまた、南京の古林律寺に駐在し、仏学院で教鞭をとりながら、棲霞山の調査を再三行なったが、その成果は『南京青年叢書第1輯 六朝の勝地 千仏の名藍 棲霞山史蹟』¹⁷⁾として出版されている。その後、昭和十六年（一九四一）三月十二日には蘇州靈巖山の印光法師の荼毘葬への列席を兼ねて、同月十五日から十九日まで、杭州の日華仏教会を拠点に、昭慶律寺、靈隱寺、淨慈寺、文瀾閣をまわっている。さらに、同年七月、山西省五台山へ六月大会に参列し、帰る途中に太原城内の崇善寺に寄り、元時代の南山普寧寺版の大蔵経を発見したり、積砂版の大蔵経を実見するなど、充実した仏跡調査を行なっている。こうした成果は、『支那仏教史学』や『龍谷史壇』に掲載され、これを列記すれば、

「中国現代の放戒と戒疤・戒牒」『支那仏教史学』第四卷第三号、昭和十五年一月

「吳興妙巖寺版藏經雜記」『支那仏教史学』第五卷第一号、昭和十六年六月

「歴代編年釈氏通鑑対校拾遺記 静嘉堂宋奩待訪録」『龍谷学報』第三三二号、昭和十六年二月

「入唐靈仙三藏と五台山」『支那仏教史学』第五卷第三・四号、昭和十七年三月

「太原崇善寺新出管主八の施入経と西夏文大蔵経の残葉」『支那仏教

史学』第六卷第一号、昭和十七年七月

「光明禪師施入經典とその扉絵―元白雲宗版大藏経の一考察―」『龍谷史壇』第三十号、昭和十八年七月

「元代白蓮教の刻藏事蹟」『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十九年一〇月

「磧砂藏経の西夏文字」『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十九年一〇月
となる。

このように、貫弑の中国各地での調査過程を振り返ると、今回、西蔵寺から新出した貫弑が書き記した調査報告や写真類、その他、入手した書類・土産物のパンフレットなどは、興亜留学生としての貫弑の一連の行動を明らかにする手掛かりになると考えられ、その点、非常に貴重な資料であると考ええる。

六 むすびに

貫弑は昭和十七年（一九四二）三月、助手に欠員が出たために研究科の指導教授高雄義堅に呼び戻され、同年四月から龍谷大学文学部（史学・仏教史学）の助手と中央仏学院の囑託講師を兼務することとなる。そして、昭和二十年（一九七五）から龍谷大学専門部教授となり、昭和三十六年（一九六一）経済学部増設にともない、龍谷大学文学部教授と

【特別調査報告】西蔵寺蔵「小川貫弑資料」調査報告（二）

なった。昭和四十三年（一九六八）には図書館長となり、昭和五十年（一九七五）には龍谷大学を退職し、京都の下宿先であった、妙心寺内の春光院を引き払い、各務原へ戻ることとなる。蔵書類や研究資料はすべて一間の廊下に敷き詰められていたが、春光院は貫弑の妹信子の嫁ぎ先であったため、処分されることなく、すべて各務原に引き上げることになった。

以上のように、西蔵寺蔵「小川貫弑資料」は、龍谷大学の学部生だった頃からの全ての収集物が保全されている資料群であり、これらのうち、新出資料として特に注目されるのは、貫弑が中国留学中の調査報告、写真、軍部のピラなど多岐にわたる資料群で、主に南京棲霞山調査資料、五台山六月大会調査資料、太原崇善寺調査資料の三つに分類される。今後、写真類についても、調査資料と突合し、精査していく過程で人物が特定されていく可能性があると思われる。戦中どのような方法で中国仏教史が調査されたのかということが、今後、この新出資料を研究することによって明らかになることを期待している。

註

(1) 道端良秀「支那仏教史の概説書概観」『支那仏教史学』第一卷第一号、（法蔵館、昭和十二年）、小笠原宣秀「昭和十一年の支那仏教史学界点描」『支那仏教史学』第一卷第一号（法蔵館、昭和十二年）。

参考文献

- (2) 貫式はその他にも『顕浄土真実教行証文類』の坂東本の研究で知られる人物でもある。
- (3) 小川徳水「西厳寺の歴史」(西厳寺)。
- (4) 小川貫式手記「仏教史学を志して」(西厳寺蔵「小川貫式資料」、昭和五十一年)。
- (5) 小川徳水氏談。
注4小川前掲手記。
- (6) 「戦時教学」研究会『戦時教学と真宗』第一卷(永田文昌堂、昭和六十三年)。
- (7) 「興亜精神と仏教」(『教海一瀾』昭和十四年八月二十五日)。
- (8) 「本山録事」(『教海一瀾』昭和十三年十一月十五日)。
- (9) 「龍大の二留学生と満州学院員生決る 満州国の開拓者」(『中外日報』昭和十二年三月十九日)。
- (10) 注4小川前掲手記。
- (11) 『支那仏教史学』第四卷第三号(法蔵館、昭和十五年十一月)。
- (12) 「南京及蘇州に於ける仏教の実情調査」(『華中連絡部調査報告シリーズ』第二十二編、昭和十五年五月)。
- (13) 常盤大定「古賢の跡へ支那仏蹟踏査」(金尾文淵堂、大正十年)。
- (14) 小笠原宣秀・宮崎圓遵・小川貫式・日野昭「座談会」龍谷史壇創刊五十年記念特集回顧五十年」(『龍谷史壇』第七十五号、昭和五十四年)。
- (15) 『南京青年叢書第1輯 六朝の勝地 千仏の名藍 棲霞山史蹟』(南京青年会、昭和十五年)。

- 龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史』通史編上(龍谷大学、平成十三年)。
- 大谷大学百年史編集委員会『大谷大学百年史』通史編(大谷大学、平成十三年)。
- 道端良秀『大東名著選14 日中仏教友好二千年史』(大東出版社、昭和六十二年)。
- 槻木瑞生編『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第4期 日本佛教団(含基督教)の宣撫工作と大陸』第三卷(龍溪書舎、平成二十四年)。
- 浄土真宗本願寺派国際部 浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派アジア開教史』(本願寺出版社、平成二十年)。
- 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『興亜院と戦時中国調査 付刊行物 所在目録』(岩波書店、平成十四年)。
- 小島勝・木場明志編『龍谷大学仏教文化研究所叢書Ⅲ アジアの開教と教育』(龍谷大学仏教文化研究所、平成四年)。

執筆者紹介

- 小山正文（研究顧問）
新野和暢（客員研究員 名古屋大谷高校教諭）
市野智行（客員研究員 本学非常勤講師）
木越祐馨（加能地域史研究会代表）
藤井由紀子（所員）
中川剛（客員研究員 愛知学院大学 博士課程後期）
高木祐紀（客員研究員）
小川徳水（西嚴寺住職）
工藤克洋（客員所員 京都産業大学史編纂室嘱託員）
松金直美（客員所員 真宗大谷派教学研究所助手）
脊古真哉（客員所員 本学非常勤講師）

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号

平成二十九年三月二十五日 印刷

平成二十九年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一

編集者 同朋大学佛教文化研究所

幹事 安藤 弥

電話 ○五二―四一―一三三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 株式会社 カミヤマ